

基礎日本語

角川小辞典 7

森田

角川小辞典——7

基礎日本語

森田良行

意味と使い方



角川書店



基礎日本語——意味と使い方

著者・森田良行

発行者・角川春樹

印刷者・増田嘉十 東京都千代田区飯田橋三の十一の二十二

製本者・若林義一 東京都板橋区舟渡三の二十の十三

発行所・角川書店 東京都千代田区富士見二の十三の三・郵便番号102

振替口座 東京三一一九五二〇八・電話03(265)七一二(代)

初版・昭和五十二年十月三十日発行

三版・昭和五十三年一月十日発行

装丁・代田 煥

製版印刷・祥文堂印刷所 製本・若林製本

落丁本、乱丁本はお取替えいたします

0581—060700—0946(0)

©Printed in Japan

著者紹介

森田良行^{よしな} 昭和五年一月二日東京都杉

並区で出生。家は代々石川県金沢の住人だったが、著者の言語形成は初めから東京語であった。高校時代から文学とことばに興味を持ち、早稲田大学第一文学部に入學。国語学を専攻、大学院に進み、現代語の文法、表現、意味、文体を研究。高校の国語教育に携わって後、昭和三十九年から早稲田大学語学教育研究所で外国人への日本語教育に従事。日本語を外国語の立場から分析し研究している。現在早稲田大学教授。東京外国語大学、津田塾大学でも日本語や作文についての教育に従事。現代語の文法や意味に関する研究を紀要、雑誌、講座などで多く発表している。

まえがき

ことばの意味を知るために私たちは国語辞典を利用する。日ごろ使い慣れたことばなら、特に辞書に当たらなくても、意味がわからない、使い方がわからないという不自由さを覚えなない。日本人ならだれでも基礎的な日本語は一通りマスターしているのであるから、何も今さら辞書を引かなくても、と思うのも自然である。しかし、正しい日本語を使って書いたり話したりしようとする、意外とむずかしいのが日ごろ厄介になっている基礎語である。それは意味の領域がひじょうに広いため、本義から転義、比喩的な意味までさまざまな意味や用法を包含していることと、対応する他の語との意味用法の重なりとずれが複雑で、微妙な使い分けや意味の分担を行っているためである。やさしいと思われる基礎語ほどむずかしい、というのは真実である。

では、そのような語はできるだけ辞書に当たって調べたらよいということになるのだが、残念ながらそれによって十分な解答は与えられない。現在の国語辞典は、その語の意味分類を旨としており、用法上の問題や、関連する他の語との対比の上で、意味の違いや発想の違いを取り上げていないからである。語の意味と用法とをじゅうぶん知るためには、どうしてもその語の基本となる意味から発して、どのように意味が転化していくかを跡づけるとともに、対義関係にある語や類義の語を同時に取り上げて、ことばをセットとして眺めていく辞書が必要である。そこで、従来の辞書では扱わなかった、ことばの意味・用法の細かい分析、関連する語をできるだけ多く取り上げて、その違いや使い分けを詳しく述べていく辞書ということを念頭において執筆したのが本書である。

もとより意味の把握は個人差のあるものであり、絶対にこうである、こうでなければならぬと断定できるものではない。その意味で、本書で示した内容は、著者の意味理解であり、意味解釈であつ

て、これとはまた別のとらえ方・考え方も当然あってよいわけである。やや冒険かと思われるほど強く著者の見解を示したところもあるが、そのような見方・とらえ方もあるという一つの見本として、ことばを考えていく上の指針としたからである。

ことばの意味分析は容易なようで意外とむずかしい。それは意味分析の方法論が確立されていないことによるのであるが、本書では、ことばを単に意味の面から眺めるだけでなく、用法と関係づけて、文中での働きとして語の意味を考えるところという立場を取った。文型の概念を積極的に取り入れたのもそのためである。多くの読者にはなじみの薄いものかもしれないが、一つの新しい試みとして受け取っていただきたい。時には危険を承知で著者独自の見解をうち出したところもあるが、解説の焦点を広げるためには、平均的な解釈に安住することを許さない。その意味で本書の解釈は、決して万人普遍のものではない。著者という一個人の日本語観の記録である。所詮、ことばというものは各個人経験の集合にすぎないのだから。

なお、本書では、動詞・形容詞・副詞を中心に基礎的な和語を取り上げたが、個々の語の分析を詳しくするためには、どうしても語数をしぼらなければならない。問題の多い語はできるだけ取り上げるよう心掛けたつもりではあるが、紙数の関係で割愛したものも多い。大方のご叱正を期待するものである。

昭和五十二年十月

著 者

ことばの意味と使い方

——凡例にかえて——

一 ことばの意味

「国語辞典とは、ことばの意味を記述した本である」と言われる。まことに当然のことのようであるが、さて考えてみると、意味の記述とはそれほど容易なものなのだろうか。解説はあのようなもので十分と言えるのだろうか。疑問が湧いてくる。国語辞典がことばの意味を調べるために利用するものだとするならば、はたして現状はその目的を十分に果たしているといえるのだろうか。

たとえば「なるべく」という語を引いてみる。多くの辞典は「できるだけ。なるだけ」とあり、「なるだけ」を引くと「できるだけ。なるべく」と出ている。「できるだけ」は一語と考えないのか、見出し語として立てない辞典が多いようだ。動詞「できる」から類推せよということなのだろう。

ところで、「なるべく早く来てください」と「できるだけ早く来てください」とでは明らかに意味に違いが感

*本書は巻末の索引も参照の上、ご利用ください。
*「品詞略称一覧」は五〇七ページに収めました。

じられる。また、「なるべくなら」という仮定の言い方は「できるだけ」には見られない用法である。一見似たような意味を持つ語同士でも厳密に比べたなら、意味や用法にはおのずから違いが見出だされるはずなのに、その違いも、それぞれの語の意味や用法も、詳しくは解説されていない。語義解説によってその語の意味を知ると同時に、語義解説からその語の正しい使い方がわかると同時に、「理解」と「表現」との両面に役立つ意味記述というものはできないものだろうか。もしそれが可能なら、それに越したことはないのだが、これは「意味」を、その語の「用法」と関係づけて説いたということになる。

語の意味や用法を究明していくためにはどのような方法をとったら効果的か。どのような点に留意して記述したらよいか。これには次の二つの道筋が考えられる。

第一は、語義分析をするための方法論を確立することである。語は「話し手」と「事柄」との関係の上に成り

立ち、それが種類によって、時には「事柄の主体」やそれが向けられる「対象」など種々の要素を設定する。さらに、動作性や状態性の語の場合は、「時」や「場所」「方向」「比較の対象」など種々の条件を加えて意味を限定していく。たとえば「さわる」と言ったとき、さわる動作には必ず「さわる主体」と「さわられる対象」とがあるわけで、それがさらに「どの部分で」「どこを」「どのような動作として」「意識的ないしは無意識的になすのか問題となる。そこで、「さわる」という語が文中で働くときにどのような要素や条件が設定されているかを逆に抽出し、その一つ一つのポイントを結ぶ線引きをして、それを手掛かりとして語の意味をえぐり出す。たとえば「ことばの解剖」である。どのようなことをポイントとして取り上げるかは、それぞれの語の種類と性質とによっておのずと決まってくる。したがって、始めからことばの種類に応じて幾つかのポイントを用意しておき、解剖台に載せたことばを、そのポイントの線引きに従って順々に切り開いてみる。そうすれば、そのことばの持つ意味特徴や用法の特殊性が探り出され、明確にされていくのではないだろうか。

現象を説明するには幾つもの条件を用意して、その条件に対してイエスカノーかをはっきりさせながら、順々

に詰めていって真の姿に迫っていくという方法がとられる。数学や物理学など自然科学の分野では、現象の分析・証明法としてこの方法を論理的に適用している。ことばの分析にもこのような論理的な方法を立てることは不可能でないと思われる。それによって、その語の持つ独自の発想法が把握できるのではないだろうか。

ことばをこのような方法で分析していくためには、第二の道筋として、ある一つの語をその語だけで考えるのではなく、分析するとき、その語と対応して逆の条件を満たすことばや、類似の条件構成をなすことばを同時に扱うということが肝要となる。いわゆる対義語や類義語、自動詞に対する他動詞などである。たとえば「上がる」を考えていく場合には、同時に「あがる／のぼる／さがる／さげる／くだる／おりる／おろす」といった一連の語を取り上げ、同じような線引きをして比較することにより、各語の意味や用法の違いが際立ってくるであろうし、「あがる／さがる」の対義関係や、「あがる／あがる」の動詞の自他関係における対応が意味・用法面でうまく対応しているか否かもはっきりしてくる。このように、ことばをあるセットとしていっしょに取り扱うことによって、語ごとの細かい意味の違い、微妙なニュアンスの差にも触れることができ、そこから、それらの語に共通

する。「発想法」の姿にも迫ることができるのである。そうすれば、「おりる」に対して「落ちる」がどう違うかといったことも、おのずと明らかになってくるであらう。このように、「ことばの意味」というものは、従来の辞典のように、そのことばだけを取り上げたのでは観察が十分には行き届かないものなのである。

辞典の記述によって、「落ちる」とは、「自然の力によって上から下へと動く」ことだとするならば、ボールが坂の上から転がっていくのも、木の幹にしがみついて滑り降りるのも、縦どいを伝って水が流れるのも、投げた石が水面から底へ沈むのも、みな「落ちる」でよいことになる。そこで、このような語義記述からことばの意味用法を理解して文を作ると、日本語にならないという珍妙な結果が生まれてしまうのである。これは「落ちる」という語の分析が十分でなかったということ、つまり分析に当たってその線引きが不完全であったため、その語の意味を十分に採り出すことができず、見落としていた点が多かったという点である。「落ちる」の分析の際に「おりる／＼くだる／＼さがる」、さらに「沈む／流れる」などにも目を向けていたら、それらとの違いが際立つような線引きができ、もっときめ細かな意味記述が行われていたのではないだろうか。

語の種類によって解剖のメスの入れ方はおのずと決まってくる。分析のポイントとなる事項を漏らさず取り上げ、それを手掛かりとしてできるだけ細かく線引きをし、多面的に各方向からことばを切っていけば、その切り口にその語の持つさまざまな特徴が必ず現れてくるはずである。建築において見取り図や平面図、側面図などを作るように、ことばの意味記述も多元的であったほうがよい。では一体、意味分析にはどのような事柄が分析基準として考えられるであらうか。本書の意味記述において心して取り上げた問題点を順次説明していこう。

二 意味分析で取り上げるべきこと

1 主体は何か

動詞や形容詞・副詞など概念を表す語は、必ず何かについて述べたものであるから、その事柄の主体を想定することができると言える。「流れる」と言えば「何が流れる」のか、「明るい」と言えば「何が明るい」のか、「ゆっくり」と言えば「何がゆっくり」なのか、その動作や状態の主体が必ず存在するはずである。そこで「流れる」という運動を成立させることができる主体にどのようなものがあるかをまず説明記述する。「水」は流れると言え、

「石」は流れると言えるのだろうか。「人」はどうか、「橋」はどうか、「家」はどうか、「村」は、「雲」は、「星」は、「空気」は、「会議」は、「事件」は、「月日」は……と、「流れる」で表すことのできるもののできなものをとを区別して、そこから「流れる」の主体となる事物がどのような性質のものかを見定めて、記述する。この場合、水や油のような液体と、空気・霧のような気体もしくは気体状のものと、「橋が流れる」のような固体と、「会議が流れる」のような事柄と、……というように流れる主体を「人」か「物」か「事柄」か「時」か、物ならば「気体」か「液体」か「固体」かというふうになり、それぞれ的事物に応じて細分し、そこから同じ「流れる」でも流れる状態に違いがあることを区別し、整理して記述する必要がある。それによって「水が流れる」なら水自体の移動だが、「木の葉が流れる」は液体の移動につれて運ばれる運動だというように、「流れる」の表す内容にも主体によって幾つかのグループに分けることができる。その各グループ間には「流れる」に共通した発想と、最も基本的な意味、およびそこから各グループへと転化していく意味の派生の姿を見て取ることができ。このように、主体の性質と結び付いてその語の意味体系が成り立っているのであるから、語の意味分類は

“主体”を抜きにしては考えられない。

2 対象や相手は何か

ことばによっては、さらに「相手」や「対象」も問題となる。「話す」や「教える」という行為は、行為主体「だれか」のほかに「だれに」という行為をさし向ける相手や、「何を」という行為の対象を考へることによって意味が具体化する。形容詞「明るい」や「甘い」など、一見「何が」の主体しか前提としないようであるが、文脈によっては「世界の政治に明るい」「子供に甘い親」のように対象や相手を考へる使い方もあるわけで、それによって「明るい」や「甘い」の意味するところが違ってくるのである。動詞の場合には、形容詞よりもはるかに複雑で、「弟に秘密を話す」「弟に秘密を教える」と「相手」「対象」を同時に設定して、秘密の内容を相手に「伝える」「明かす」意を帯びる。同じ「教える」でも、対象が変われば「コンピュータに情報を教える」「駅へ出る道を教える」「人間の生き方を教える話」「犬に芸を教える」「学生に英語を教える」と、それぞれ少しずつ「教える」の意味するところが違ってくる。「ごみを出す／レポートを出す／声を出す／賞金を出す／芽を出す／スピードを出す／赤字を出す／暇を出す」のように、語

によっては、「対象」に応じてさまざまに意味分化をしている例も多いので、できるだけ詳しくその語が取る「対象」や「相手」を列挙した。

3 どんな文型か

同じ「出す」でも、「私は先生にレポートを出す」「後援会が優勝者に賞金を出す」「主人が女中に暇を出す」と「AがBにCヲ出す」形式をとるものと、「会社が赤字を出す」「列車はスピードを出す」「桜が芽を出す」のように「AがCヲ出す」形式となつて「相手B」を必要としないものがある。同じ「……に」と言つても、

(1) 先生にレポートを出す

(2) 娘を嫁に出す

(3) 道路にごみを出す

ではまた違う。(1)は「その相手に」だが、(2)は「嫁として」であり、(3)は「その場所に」である。そこで、區別して、(1)「BにCヲ出す」、(2)「CヲDニ出す」、(3)「EにCヲ出す」と書き分ける。(1)(2)は「くヲ」「くニ」の順を入れ換えて「レポートを先生に出す」「ごみを道路に出す」とも言えるが、(2)「嫁に娘を出す」とは言えない。(2)の意味で使われる「出す」は必ず「CヲDニ出す」であつて、語順を動かすことができないのである。

このように、その語を使って、あるまとまった一つの文形式を形づくる文の雛型を「文型」と呼んでいる。文型は基本となる文の骨格であるから、文脈によっていろいろに変形する。「彼は先生にレポートを出す」も「彼女も先生にレポートを出す」も「私は先生にレポートは出す」も、基本では同じ文型と考えていい。さらに種々の肉づけをして「私は今学期はあの先生にはレポートを出さない」「私ならどの先生にもすぐレポートを出す」のように文型を拡張していく。しかし、「出す」の意味そのものは皆「提出」の義の(1)文型として一括できる。本書において示した「文型」も、その語の基本となる文型のみであるから、右のような変形がなされることを含んだうえで、見ていていただきたい。

動詞や形容詞は語ごとにだいたい文型が決まっている。「直る」なら「Aが直る」と最低「直る主体」を問題とすれば事足りるが、「勝つ」だと「AハBニ勝つ」のように主体(A)と相手(B)との関係の上になり立つ。「貸す／見せる／届ける」などは「AハBにCヲ貸す」のように、さらに対象(C)も問題となる。「変える／選ぶ」などは「AヲDニ変える」のように、Aがどのような事柄として変えられるのか、選ばれるのか、そうされる結果(D)が問題となる。「いる／ある／住む」

などでは「AハEニいる」と、場所(E)を設定しなければ意味をなさない動詞である。形容詞は動詞ほど複雑ではないが、「美しい／うれしい／大きい」などほとんどの語が「Aハ美しい」文型となる。まれに「甘い／辛い／近い」など、「彼は息子に甘い」「この町は海に近い」のように「Bニ」をとる語も見られるのである。これらA、B、C、D、Eの記号は、語によっては随所に現れるので、あらかじめ承知の上で読んでいく必要があると思う。

4 文型と意味との関係は

たとえば「進む」という動詞を調べると、同じ語が数種類の文型を取っていることがわかる。

- (1) 「……ガ進む」……仕事がく／研究がく／交渉がく
 ／食がく／気がくまない／時間がく
- (2) 「……ガ……ニ進む」……彼は大学にく／会社へく
 ／建築関係にく／(双六)次へく
- (3) 「……ハ……ヲ……ニ進む」……街道を西へく／曲がり角を左へく／車内を奥へく

事柄が主体のときは(1)文型をとり「進展、進捗」、時間が主体のときは「経過」などの意味となる。(2)は進むところ——次の上位段階——を「に」「へ」格で示して

「一段階前進」という地位的、位置的な転換を表す。(3)は、さらに、進む径路を「を」格で示すことにより、具体的な場所的移動となる。「……カラ……マデ」と移動の区間を加えることも可能な文型である。以上のように、同じ「進む」でも文型によって、(1)進展・進捗・経過、(2)前進・移行、(3)移動、と意味に違いが出てくるのである。本書の意味記述においても、特に動詞は文型に留意して意味分類を行ったので、文型とそれによって規制される個別の意味との関係に注意して読んでいただきたい。

5 有情と非情、意志的と無意志的

同じ「進む」でも右のように意味に開きが出てくる裏には、その文型を支える要素に違いがあるからなのである。第一は、その行為や動作・状態などの主体(A)が人間か、物か、事柄かという点である。「進む」の場合、(1)は「仕事、研究、交渉、食、気」などの「事柄」である。また「時間」である。事柄や時間は意志を持たない「非情物」(事柄・物体を含めて)であるから、「進む」の意味も「事柄や状態の進展」という概念的で抽象的なものでしかない。「移動」というよりむしろ「変化」である。主体の意志とは関係なく運ばれる現象や結果であ

る。(2)は意志を持った人間、もしくは双六の例のように、人によって動かされる物が主体となっている。これは「有情者」と考えていい。その主体の意志によって行われる行為であるため、かなり具体化した「前進する」という位置的移行を意味するわけである。(3)は人間や動物などの有情者か、人によって動かされる物(乗り物など)、それ自体で移動をする非情物(雲、川の流れ、台風など)つまり「本来移動するもの」が主体となっている。そのため「進み行く」という具体的な移動動作となっている。

右のように、主体(A)や相手(B)、対象(C)を文型として考えるときは、それらが意志を持った人間や動物(有情者)なのか、それを持たない物や事柄(非情物)なのかを区別しておくかつごうがいい。さらに、その動作・行為・作用などが主体による意志的なものなのか、無意志的なものなのか、意志的行為ならどのような意志によって行われているのか、などを区別しておくことは、意味を細かく規定する上で必要である。同じ語でも「残る、落とす、死ぬ、はいる」のように意志・無意志両方に働く例もあり、それによって意味や用法に違いが出てくる。(無意志動詞は可能の言い方ができない。)また、「さわる、触れる、たたく、打つ、上がる、のぼる、

いきなり、突然、不意に」など、このような見地で分析して初めて意味の細かい違いに触れることができる語も多い。なぜ「不意に痛みが取れた」とは言わないのか、なぜ「時計が十二時をたたくと」は言えないのか、このような問題にも触れるためには、右の「意志的・無意志的」「有情・非情」の違いを物差しにすることが有効なのである。

6 瞬間動作と継続動作

「双六で次へ進む」と「街道を西へ進む」とでは、進み方が違う。双六の例は次の段階への移行であるから瞬間動作、街道の例は径路上の移動であるから継続動作となる。その違いは「を」格(「街道を」)のあるなしによるのであるから、文型から生ずる意味の違いと考えることができる。「五時になったらうちへ帰ろう」「今晩は九時ごろ帰るから、夕飯は食べない」の「帰る」は瞬間動作で「帰宅」の意。「帰る途中で旧友に会った」は継続動作で「帰途」の意となる。これらの例は文型や文脈によって生ずる意味の違いだが、「痛い／痛む」のような品詞の違いからくる意味の異同、「やっと／ようやく／だんだん」のような副詞でも、語によってはこの「瞬間性」「継続性」の違いを当てはめていくと、意味分析の上で

有効である。また、「窓があいている／雨が降っている」のような「ている」の付く言い方においても、表す意味に両者の違いが反映されるので、表現理解のためにも「瞬間」「継続」の概念を導入することは有効なのである。

7 部分的か全体的か

動作や状態が成り立つとき、それが主体の全体にわたって起こるものなのか、部分的に起こるものなのかを弁別することも大切である。「上がる」は「二階へ上がる」「手が上がる」と全体動作にも部分動作にも使えるが、これは意志的な場合で、無意志的な現象「気温が上がる／バス代が上がる／効果が上がる」など非情物は全体的なものとなる。「のぼる」は「屋上にのぼる／山に登る／太陽が昇る／水銀柱が昇る」と意志や無意志、有情や非情にかかわらず全体的な動作・作用となる。

形容詞も「冷たい」や「痛い」は部分の状態や感覚だが、「寒い」や「苦しい」となると全体的なものとなる。このように動作や作用・状態などを「部分的な現象」と「全体的な現象」とで区別して見ていくことは、類義的な語の意味比較に役立つことが多いのである。

8 行為・作用の方向や道筋

「打つ／たたく／行く／来る／やる／もらう／送る／返す／進む／退く／落ちる／流れる」のような動作・行為・作用など、なんらかの運動を伴う事柄、あるいは「わざわざ／あらかじめ／いっそ／繰り返し／再び」など運動を前提とした事柄は、その運動がどの方向へと向かって進んでいくのか、どのような道筋をたどって進められるのか分析することが肝要である。前後方向、上下方向といった客観的な方向だけでなく、「行く／来る」「やる／もらう」のような、話し手や行為主体から見た方向性も問題としなければならない。また、「あらかじめ／いづれ／やがて」のように、事柄成立の時点もあわせて考えていく必要がある。本書において、話し手や、行為主体、状態主体、対象などの相互関係を問題とし、さらにその上、動作や働きかけの方向、在り方、話し手の視点、表現において話し手や事柄の立つ時点などをわずらわしいほど問題にしたのも、それが結局はその語の意味を規定する重要な要素であると考えたからである。全体的に見れば、その語の「発想」と言ってもいいだろう。

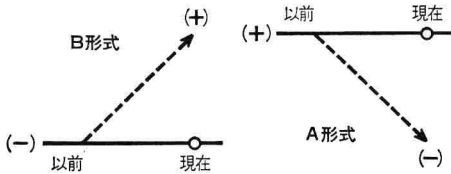
あ

あいかわらず 「相変わらず」 副

ある事柄の程度が、時間的に隔たっているにもかかわらず、前と同じ程度で変わっていない状態。

分析 「その後も相変わらずお元氣のこととお喜び申し上げます」「結婚しても相変わらず旧姓で通している」「相変わらずのみごとな出来映え」「相変わらず豪勢な生活をしているな。奴、金が入るとみえる」「駅前は昔と変わらない。相変わらずの人混みだ」「相変わらず人使いが荒い」

「相変わらず」という以上、話し手の脳裏では、過去のある時期の状態を思い出し、それと現在の状態とを比較している。そこに変化が見られなければ「相変わらず」ところで「相変わらず」の発想には二種ある。世の中の人生、肉体、何事によらず時の流れとともに変化するものだが、その変化にはマイナス方向への変化とプラス方向への変化とがある。健康で元氣な肉体は年を経れば老化し弱ってくる。「奢れる者久しからず」の喩のように、



権勢のある者、富める者はやがて権力や富を失う。これはマイナス方向への変化である。一方、幼いひ弱な肉体は成長すれば大きく強健になってくる。薄給の身も榮身出世すれば収入が増える。拙かった技術も努力によって練達し、腕が次第に上がっていく。これはプラス方向への変化である。

これらプラス・マイナス、反対方向への変化の差は、出発点となる過去のある時期（「あいかわらず」の基準）がいつごろかによって異なる。その時期において、今話題としている事柄の程度がプラスの状態であったか、マイナス状態であったかが、A形式、B形式の分かれ道。その判断は主観的なもの。賑やかな町が二十年後の現在も変わらず賑やかさを保っているなら「相変わらず賑やかだ」と言える。この場合、「賑やかさ」を好ましい状態と考えれば、町がさびれず繁盛している意で、プラス評

価。好ましからざる状態と考えれば、雑踏でうるさく、埃ほこりっぽく、排気ガスで公害を撒き散らし、ろくなことがないやな町として、マイナス評価となる。

さて、プラス状態にあるものは当然、時の経過でマイナス状態へと下落していくものだが、そうはならず過去のプラス状態を維持している。A形式の「相変わらず」である。

「隠居様、相変わらずお元気で何より」「奥様は相変わらずお美しいこと」「相変わらず羽振りをきかせている」「相変わらずの繁盛ぶり」

一方、以前はマイナス状態であったものは、時が流れば、おのずと上向きになり、プラス状態へと浮上していくものだが、それがさっぱり好転しない状態であれば、B形式の「相変わらず」である。

「相変わらずの安月給のびいびい」「もう高校生だというのに、相変わらずのちびだ」「入門時代とさほど差のない相変わらずの小型力士」「やあ、どうだい／＼いや、相変わらずさ」「景気は相変わらずの低成長型」「もう三年もアメリカにいるというのに、相変わらず発音がよくないね」「もう中学生だというのに、相変わらずテレビにかじりついて漫画映画なんか見て」「相変わらずのおちよおちよちよちよ」

「先生、相変わらず××高校で教えてるんですか」「まあ、お久し振り。相変わらず××会社にお勤めなの」のような挨拶は、はなはだ失礼。あれから何年も経ったのだから、もつと出世していて然るべき、あるいは、もう職を辞して悠々自適の生活が送れる身分なのに、というプラス方向への変化（B形式）を前提とした発想だからである。注意したい。↓やはり

関連語 依然として

「依然として」も、元のままであることを表す点で共通する。ただし、これは動作・様子・態度・状態が固定して変化しない様子を形容し、特にプラス方向、マイナス方向への変化を前提とした不変の状態ではない。

「両力士、水入り後も依然として動かず」「景気は依然として回復しない」「かたくなな態度を依然として改めようとしなない」「依然として音沙汰なし」

「相変わらず」と違って、「旧態依然たる」の形を除けば、連体法・終止法がない。打消に呼応する。

あいにく (生憎) 副 形動

ある行為を行おうとするとき、それに不都合な状態が生じるといふマイナスの状況に用いる。

例 「あいにくの雨」「バスに乗ろうとしたら、あいにく」

くなことに細かい持ち合わせがなかった」「く／＼の／＼な」の形で名詞に係る言い方。「あいにく雨が降っている」「あいにく他に用事があったて行かれない」「あいにくと病気で出席できない」などの「あいにく／＼あいにくと」の形で用言に係る言い方。「あいにくだ。今、持ち合わせがない」「あいにくですが、在庫がありません。またお出かけください」「それはあいにくだったね」と述語になる言い方。さらに「おあいにくさま」の挨拶言葉に至るまで、種々の形を持つ。

分析 「あいにく」は、何か事をなそうとする当人にとって都合の悪い事態である場合。当人にとって「あいにく」であっても、他者には好都合の場合はいくらでもある。したがって「あいにく」で示される状況は、だけれども「あいにく」と思う普遍性を持ったものから、常識に反する、きわめて特殊で個別的な場合まで、いろいろ。「あいにくの雨」「あいにく持ち合わせがない」は前者。これだけで十分理解がつく。ところが、「あいにくのいいお天気」とか「あいにくたくさん金がある」などとなると、これは一般常識に反するあいにくの状態なので、これだけの文では理解がつかない。「あいにく」のマイナス状態と「いい天気」のプラス状態とは矛盾概念であるから、一般には両立しない。

「雨量測定をする予定だったのに、今日はあいにくのいいお天気」

と、マイナス状態となるための状況説明が必要。

分析 「あいにく」は当人にとってのマイナス状態の生起。「出かけようとしたところへ、あいにく客がぎちゃった」は、客にとってのあいにくではない。「あいにく、ぼくの留守中に先生がお見えになったらうれしいんです」

これも、自分が留守をしたことに対して、あいにくと感じている。

関連語 折りあしく

「折りあしく」は、事をなそうとする時機の具合悪さを言う。場面的な状況が当人にとって好ましくない状態にあること。したがって、

「出発の時間になったが、折りあしく強い雨が降りつけていて、とても出かけられる状態ではない」「さあ、これからテレビ映画が始まるというところへ、折りあしく来客があって、せっかくの映画が見られなくなってしまう」のような例はよいが、

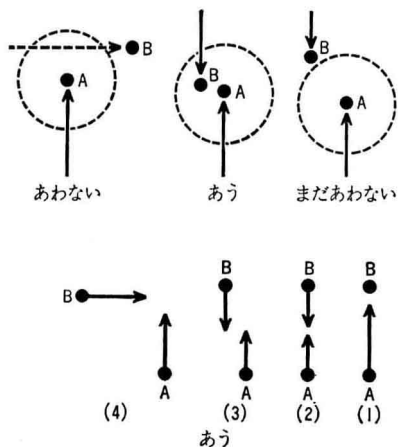
「会議を始めようとしたが、あいにく議長が出席してない」「鉛筆を買いにいったが、あいにくHBは品切れだった」

などでは、「折りあしく」はそぐわない。

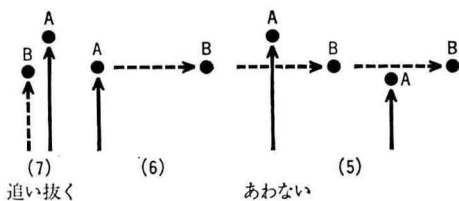
あう 「会う、合う」 自動

位置の固定していない二者が互いに関係を持つ程度に接近し、または接触し、一方が他方に対してなんらかの関係を持つ状態に置かれたと認知する判断。

【分析】「あう」関係を持つ A・B 二者は「人—人／人—物／物—物／人—事／物—事」など、種々の場合があるが、いずれも、当事者 A が B に対し、自己の勢力圏内に入ったと判断した場合に限られる。勢力圏は、地理的距



図(1)のように、Bの位置が固定し、Aのみが移動して「会う」場合。ただし、Bは臨時に静止している場合(ふつうは人間)で、本来そこに位置を占めている物には「会う」は使えない。「公園を散歩していたら、ベンチに座って休んでいた老人に会った」とは言わない。「会う」は「大きな松の木に会う」とは言わない。「会う」は「またまたま出会います」という偶然性が支配しており、Bが固定した



離、心理的距離、嗜好・性格などの許容範囲、形状・色彩・重さ・内容などの価値・特質の融合範囲といろいろ。

【途中まで先生に会った】「夕立にあう」「上り最終電車はN駅で下り電車にあう」「父兄に会う約束」「喫茶店で会う」などは地理的距離。ただし「あう」と判断するのは、あくまで心理的な要素を伴う。「会う」は「出会う」で、両者の前面が、互いに見える角度で距離的に接近し、相手もしくは対象を認知することが必須条件。図(1)の